

鞍馬の火祭り

広河原の火祭り、鞍馬の火祭り、奈良のお水取りは、ゾロアスター教を背景として、インド僧・実忠（じっちゅう）が始めたものである。

鞍馬の火祭りは、鞍馬にある由岐神社例祭の一つであり、京都三大奇祭の一つに数えられている。集落各所に焚かれたかがり火の中を、氏子が松明を持って練り歩いて神社山門を目指す。京都三大奇祭とは、「鞍馬の火祭り」、「今宮やすらい祭り」、「太秦の牛祭り」のことである。「今宮やすらい祭り」と「太秦の牛祭り」とは、すでに紹介したので、ここでは鞍馬の火祭りについて説明したい。

鞍馬の火祭りについては、通常、その始まりは平安時代中期と言われているが、もっともっと古く、冒頭に述べたように、インド僧・実忠（じっちゅう）が始めたものである。

実忠は、良弁に師事して華嚴を学んだ人で、東大寺の「お水取り」を始めた人である。**鞍馬の火祭り**についても、若狭の火祭りと広河原の火祭りと東大寺の「お水取り」と繋がっているのであり、歴史的な重みというものを十分感じて、その素晴らしさを感じてもらいたい。私は、今まで「火祭り」というものに重大な関心を持って勉強してきた。

白洲正子は、「かくれ里」(1991年4月、講談社)の中で『そう言えば、二月堂のお水取りの水は、若狭に通じているというが、その「若狭井」の元は遠敷郡（おにゅうぐん）にあり、花背原地町や広河原能見町からあまり遠くない。若狭から大和へ行くにのには、花背を越えるのが一番の近道なのである。**お水取りの行事は、若狭に始まり、愛宕を越えて奈良に移っていった、長い歴史を暗示していると思うが、それはある時代の豪族の移動を物語っているのかもしれない。**そういう事実がなかったら、東大寺二月堂の「若狭井」の伝説は、あまりに突拍子もない話で、伝説がそう架空なことででっち上げる筈はないのである。各部落で行われたという火祭りは、その道順を示しているのではあるまいか。**鞍馬の火祭りも、京都の大文字も、もしかするとそういう人たちが落としていった火種かもしれない。**』と言っている。

すなわち、鞍馬の火祭は、白洲正子によれば、平安時代中期に始まったものではなく、奈良時代、聖武天皇によって東大寺が建立された頃に始まったものであるかもしれない。

鞍馬寺は鑑禎（がんちゅう）が、この地に毘沙門天を安置したのが始まりとされている。

鑑禎（がんちょう）は鑑真和上（がんにんわじょう）とともに中国から来た一番若い弟子であるので、鞍馬に草庵を結ぶまでは東大寺にいて、実忠とも懇意であったと思われる。火の儀式である二月堂のお水取りの始まりもよく知っていたに違いない。鑑禎（がんちょう）は毘沙門天を祀ると同時に火の儀式として火祭りを始めた。その際、おそらく実忠の指導を受けたであろう。

しかし、広河原の松上げ、鞍馬の火祭、東大寺二月堂のお水取りの儀式は、実忠が始めたものであるにしても、わが国における火祭りの起源はもっと古い。その歴史的なものについては、次をご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/jittyuuno.pdf>

では最後に、鞍馬の火祭りの様子について、一応、次のホームページを紹介しておきたい、

<https://www.youtube.com/watch?v=mHw-nCFcPrQ>

鞍馬の火祭りは、「広河原の火祭り」や「奈良のお水取り」とも繋がった歴史的な重みを持ったものなのである。